

(第一回)

2024(令和6)年度入学試験問題

国 語

(試験時間：50分)

《注 意》

- (1) 問題は ～ まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに記入してください。
- (4) 解答に際して、句読点・符号などが含まれる場合には1字分として数えます。

城西大学附属

城西高等学校

— 1 —
次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

現在世代は、まだこの世界に存在していない未来世代に対して、影響を与えることができる。しかし、なぜ、まだ存在していないものに影響を与えることができるのだろうか。確かに、現在世代と未来世代が直接関係することはない。しかし両者は、同じ地球に生きるという点で、関係性を有している。つまり現在世代は、これから未来世代が生まれてくることになる地球に生きているのであり、その地球に対して影響を与えることによって、未来世代に対して影響を与えるのである。

もつとも、地球^①という表現はミスリーディングである。この言葉は、人間の外側に広がっている、環境的な世界を想起させる。しかし、現在世代が未来世代と間接的に共有しているものには、外界だけではなく、その内側にあるもの、すなわち身体も含まれるだろう。例えばゲノム^{*i}編集は、まだ生まれていない未来世代の遺伝子を変更する技術であり、この意味において、現在世代は自らの遺伝子を未来世代と共有しているのである。

このように、現在世代と未来世代が共有し、それを介することによって現在世代が未来世代に影響を与えることが可能になるところのものを、「自然」と呼ぶことにしよう。自然には外的なものとしての区別される。外的な自然としては人間が住む地球環境が挙げられ、内的な自然としては人間自身の身体が挙げられる。両方とも、人間が自分で作り出したものではなく、ただ与えられているもの、キョウジュ^aしているものである。しかし、そうした自然に対して人間が影響を与えることで、その自然を共有する未来世代にも影響が及ぶのである。

A、現在世代による未来世代への脅威が、現代に特有の問題なのだとしたら、それが意味しているのは、現在世代による自然への影響が、未来世代にとつての自然にまで及ぶようになったことが、現代に特有の現象である、ということである。言い換えるなら現代よりも前の時代には、人類^②による自然への影響が未来にまで及ぶことはなかった、ということだ。

これは、現代よりも前の時代には、人類が自然に影響を与えることができなかった、ということではない。そんなことは明らかにあり得ない。例えば農業をするために森林を^b、畑を耕すことは、明らかに自然に対して働きかけることである。しかし、その影響が未来にまで及ぶことはなかったのである。なぜなら、そうした影響は、自然によって回復され、なかったことにされてしまうからだ。

例えば畑は、人間が手入れを続けなければ、簡単に雑草まみれになってしまう。一〇〇年も経てば、そこに畑があったことなんて誰も思い出せないほどに、草木に呑み込まれてしまう。自然はそうした自己修復能力が備わっているのである。

こうした自然の力は、しばしば、人間に対して牙を剥く^{きばむ}。例えば巨大な自然災害が起こると、人

人間が苦勞をして作り上げたもの——橋や、家屋や、あるいは街そのもの——を、いとも簡単に。ハカイしてしまふ。そうした自然の力は、人間の力をはるかに凌駕しているのであり、人間は一度自然が猛威を振るえば、それに対して、フクジュウするしかない。

しかし、だからこそ、人間は安心して自然に働きかけることができる。すなわち、自然には人間を超えた自己修復能力が備わっているのだから、人間ごときに自然をどのように作り替えようとも、自然は自分で元の姿に戻るだろう、と期待できるからである。

このような自然観が、人類の歴史の非常に長い期間を支配していたのではないだろうか。森には広大な緑がある。人間がそこから資源を奪い取っても、森には再び緑が生い茂り、新しい資源を生み出してくれる。そうした無尽蔵の力を信じられるからこそ、人間はいつか自然から資源が枯渇するのではないかと不安に苛まれることなく、資源を収奪することができるのである。そのような人間は自然に依存し、自然に「甘える」ことができる。

このような自然観は、一方において、自然に対して人間を超えた力を認めている。B それは、決して、人間と自然の調和を目指すものだけではない。まして、そこから自然を大切にしようという倫理的な配慮が必ず導き出されるわけではない。このような自然観において人は自然を崇拜することも、自然に甘えることができるからこそ、自然に甘えることが可能になり、また自然を搾取すること、自然に対して暴力を行使することもまた可能になるのである。

こうした自然への甘えは、人間に対して、未来世代への自らの影響について配慮することもメンジヨする。たとえ現在世代が何らかの失敗を犯したとしても、自然はその失敗を帳消しにし、なかったことしてくれるからだ。C このような自然観のもとでは、人間が森から木を伐りすぎても、自然がすぐに再び木を生やしてくれるので、未来世代も自分と同じように森から木を伐ることができはらずだ、と考えることができるのである。

自然が人間よりも強い力を持ち、自己修復能力が機能している限り、現在世代は未来世代に影響を及ぼすことができない。したがって、未来倫理を必要とする課題もそこでは生じない。そうである以上、現在世代が未来世代に影響を与えることが可能になるとしたら、それは、人類の力が自然の自己修復能力を超えたときである。そして、そうした力を人類に与えたものこそ、「技術」に他ならない。

(戸谷洋志 『未来倫理』)

※1 ゲノム編集：遺伝子を書き換える技術の一つ。

問一 部aのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ―― 部Ⅰ「凌駕」・Ⅱ「無尽蔵」の言葉の意味としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「凌駕」 ア 対象物を全てハカイしてしまうこと。

イ 対象物をもとの姿に戻すこと。

ウ 他のものに対して猛威を振るうこと。

エ 他をしのいでその上に出ること。

Ⅱ「無尽蔵」 ア 豊富であること。

イ ほんのわずかであること。

ウ 巨大なものであること。

エ 相性が悪いものであること。

問三 空欄

A

く

C

 にあてはまる語句としてふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ したがって ウ また エ 例えば

問四 ―― 部①「地球という表現はミスリーディングである」とあるが、それはなぜか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現在世代が未来世代と共有しているものが「地球」であるから。

イ 現在世代は未来世代に影響を与えることが可能であるから。

ウ 「地球」という言葉は環境的な世界しか想起させないから。

エ 「地球」を共有する未来世代に対して、現在世代は影響を及ぼしているから。

問五 ―― 部②「人類による自然への影響が未来にまで及ぶことはなかった」とあるが、その理由を「くから。」に続く形で本文中から二十三字で抜き出して答えなさい。

問六 ―― 部③「人間と自然の調和」とあるが、その具体例としてふさわしくないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校の敷地内にビオトープを作り、多くの野生の鳥類や昆虫の姿を見られるようにした。

イ 絶滅危惧種の鳥類の個体数を増やすために、河川敷の整備や河川の水質改善運動を進め、個体数が増加した。

ウ 生物は存在できないと考えられてきた海底火山の火口付近で、複数の新種の生物が発見された。

エ 海底に船舶を沈め、五年後に探査してみると、そこには多くの魚類が住みつくようにした。

問七 — 線④「未来倫理」とあるが、それはどのようなものか。「倫理観」という言葉を必ず用いて四〇字以上五〇字以内で説明しなさい。

問八 — 部⑤「人類の力が自然の自己修復能力を超えたとき」とあるが、それを日本の歴史で考えた場合、いつ頃だと考えられるか。その時代としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 弥生時代に農耕社会が成立した時代。

イ 江戸時代に商業が盛んとなり、江戸の町の人口が急激に増加した時代。

ウ 昭和時代に高度経済成長期となり、急激な工業化が進んだ時代。

エ 現代にAI技術が発達し、自然の全てを人間が把握できるようになった時代。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

① 祖父が発送する荷物は大量のスプーンだった。長年、日本と世界のさまざまな土地に行くたびにこつこつ集めてきたもので、木材や金属などでつくられたものが一本ずつ仕切られたケースに整然と納まっていた。

「いつかこのコレクションを持って旅に出ようと思っていた」

銀色のスプーンをクロスで磨きながら、祖父が笑った。

「路上に絨毯じゅうたんを敷いて、さじをずらりと並べて買ってもらうか。興味を持った人には来歴②を披露ひろうする。どこの産か、どうやって手にいれたか、どこが魅力か。のんびり客と話をしながら、さじの行商をするんだ」

「荷物運びとかいらない？ そしたら、私もすみっこにいる」

「体力的にもう無理だな。一度ぐらいやってみてもよかった」

祖父が今度は木製のスプーンを布で拭いた。素朴な木目をいかしたスプーンで、コーンスープやシチューをすくって食べたらいしそうだ。

「でも、良い落ち着き先が見つかったんだ。若い友人が料理屋を開くので、彼女に譲ゆづる。好きなきじを客を選んで食事をする仕組みにすると言っていた」

鉱物に本、絨毯や織物。他にも祖父が集めているものはたくさんある。染め場の奥に、エアコンで常に温度と湿度の管理をしているコレクション用の部屋があるほどだ。

「どうしてスプーンを集めたの？」

「口当たりの良さを追求したかったのと、あとはバランスだな。良い職人が削けずったさじは軽くて美しい。手に持ったときのバランスが気持ちいいんだ。そのさじで食事をするのが軽やかでな。天上の食べものを口にしていく気分になる。同じことは私たちの仕事にも言える」

「スプーンと布って、全然別物っぽく思えるけど……」

祖父が手を止めると、奥の部屋に歩いていった。すぐに戻ってくると、手には紺色のジャケットを抱えていた。生地はホームスパン*1だ。

「おじいちゃんジャケット？」

「そうだ。お祖母ちゃんが織ったものだ。持ってごらん」

渡されたジャケットは、見た目よりうんと軽く感じた。

「あれ？ 軽いね」

「それでもダウンジャケットにくらべると若干重いかな」

ジャケットを羽織ってみるようと祖父がすすめた。

袖に腕を通したとたん、「あれ？」と再び声が出た。手で感じた重量が身体に伝わってこない。肩にも背中にも重みがかからず、着心地がたいそう軽やかだ。それなのに、服に守られている安心感がある。

「手で持ったときより、うんと軽い」

「手紡ぎ、手織りの糸は空気をたくさんはらむから、軽くて温かい。身体に触れる布の感触が柔らかいから、着心地が軽快になる。さじにかぎらず、良い職人の仕事は調和と均衡が取れていて心地よいんだ。音楽で言えば」

「★? もしかして」

「そうだ、よくわかったな」

「私、中学からずっと合唱部に入ってたの」

祖父にジャケットを返すと、慈しむようにして大きな手が生地を撫でた。

「美緒は音楽が好きなんだな」

あらためて考えると、合唱はそれほど好きでもなかった。

熱心に部に勧誘されたことが嬉しかった。合唱部はみんな仲が良さそうに見えたから、その輪に入っていると安心できただけだ。

「部活、そんなに好きじゃなかったかも。なんか……私って本当に駄目だな」

ジャケットを傍らに置くと、祖父がスプーンの梱包作業に戻った。

「この間、汚毛を洗っただろう? どうだった? ずいぶんフンをいやがっていたが」

「臭いと思ったけど、洗い上がりを見たら気分が上がった。真っ白でフカフカしてて。いいかも、って思った。汚毛、好きかも」

「そうだろう、と祖父が面白そうに言った。

②「美緒も似たようなものだ。自分の性分について考えるのは良いことだが、悪いところばかりを見るのは、汚毛のフンばかり見ると同じことだ」

祖父が何を言い出したのかわからず、美緒は作業の手を止める。赤い漆塗りのスプーンを取り、祖父が軽く振る。

「学校に行こうとすると腹を壊す。それほどの繊細さがある。良いも悪いもない。駄目でもない。そういう性分が自分のなかにある。ただ、それだけだ。それが許せないと責めるより、一度、丁寧に自分の全体を洗ってみて、③その性分を活かす方向を考えたらどうだ?」

「活かすって? どういうこと? そんなのできるわけないよ」

「そうだろうか? 繊細な性分は、人の気持ちの**あや**をすくいとれる。ものごとを注意深く見られるし、集中すれば思わぬ力を発揮することもある。へこみとは、逆から見れば突出した場所だ。悪い所ばかり見ていないで、自分の良い点も探してみたらどうだ?」

「ない。そんなの」

「即答だな」

祖父がスプーンに目を落とした。

「だって、ないから。自分のことだから、よくわかってる」

④ それは本当か、と祖父が声を強めた。

「本当に自分のことを知っているか？ 何が好きだ？ どんな色、どんな感触、どんな味や音、香りが好きなんだ？ 何をするとお前の心は喜ぶ？ 心の底からわくわくするものは何だ」

「待って。そんなの急にいっぱい聞かれても」

「ほら、何も知らない。いやなところなら、いくらでもあげられるのに」

からかうような祖父の口調に、美緒は顔をしかめる。

「そんなしかめ面をしないで、自分はどんな『好き』でできているのか探して、身体の中も外もそれで満たしてみろ」

「好きなことばかりしてたら駄目にならない？ 苦手なことは鍛えて克服しないと……」

「なら聞くが。責めてばかりで向上したのか？ 鍛えたつもりが壊れてしまった。それがお前の腹じゃないのか。大事なもののための我慢は自分を磨く。ただ、つらいだけの我慢は命が削られていくだけだ」

祖父がテーブルに並べたスプーンを指差した。

⑤ 「手始めに、気に入ったさじがあったら、それで食事をしてみる。良いさじで食物を口に運ぶ感触をとことん味わってごらん」

「えっ、でも……」

戸惑いながら、梱包していないスプーンと、コレクションが納まった箱を美緒は眺める。祖父が集めたものは、どれも色や形が美しい。そしておそらく外見のほかにも祖父の心をとらえた何かがある——。しだいに興味がわいてきて、次々とスプーンが入った箱を開けて見る。

木材、金属、動物の角。さまざまな材質のスプーンを持ったあと、最後に残った箱を開けた。

赤や黒、赤紫色に塗られた木製のスプーンが出てきた。

無地もあるが、金箔などで模様が描かれたものや、虹色に輝く装飾が施されているものもある。

一本、一本見ていくなかで、シンプルな黒塗りのスプーンに心惹かれた。手にすると、スプーンの前から柄えに向かって、真珠色の光が走った。

「おじいちゃん、これはうるし？」

祖父はうなずいた。

「これがいい、これが好き。おじいちゃん、このスプーンをください」

「美緒はこれが好きか。どうしてこれを選んだ？」

「直感？ 何かいい感じ」

祖父の目がやさしげにゆるんだ。目を細めるとやさしく見えるところは、太一※3と似ている。ほめられているような眼差しに心が弾み、黒いスプーンを見る。

幼い頃、壁にかかった視力検査表で視力を調べられたことがある。

黒いスプーンを右目に当て、おどけてみた。

「視力検査……」

一瞬、不審そうな顔をしたが、祖父はすぐに横を向いた。口もとに軽くこぶしを当て、笑っている。おどけた自分が猛烈に恥ずかしくなり、美緒はスプーンを握った手を膝ひざに置く。

たいして面白くもないだろうに、祖父は目を細めてまだ笑っていた。

(伊吹有喜 『雲を紡ぐ』)

※1 ホームスパン：家庭で紡がれた糸で作られた織物。

※2 汚毛：毛刈りをしただけの状態の羊毛。

※3 太一：美緒にとつていそこにあたる人物。

問一 —— 部①「来歴」・②「あや」の言葉の意味としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

①「来歴」 …… ア 物事が過ぎ経てきた由来 イ 物事が通り過ぎていく過程

ウ 物事に対するその人の気持ち エ 物事の原因や原材料

②「あや」 …… ア 悲観的な部分 イ 入り組んだ部分

ウ 偏見の部分 エ 注意深い部分

問二 —— 部①「祖父が発送する荷物は大量のスプーンだった」とあるが、どこに送るのか。八字以上十二字以内で答えなさい。

問三 —— ★ にあてはまる表現としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア プレス イ ハミング ウ エコー エ ハーモニ

問四 —— 部②「美緒も似たようなものだ」とあるが、祖父はどのようなことを伝えたいと考えているのか。六十字以上七十字以内で説明しなさい。

問五 —— 部③「その性分を活かす方向」について次の問いに答えなさい。

(1) どのような「性分」か。本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

(2) どのような「活かす方向」が考えられるか。本文中に挙げられているもの以外の例を示しながらあなたの考えを説明しなさい。

問六 —— 部④「それは本当か、と祖父が声を強めた」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美緒が、自分には自慢できるような美点や長所はないと言ったため。

イ 美緒が、自分の消極的な性格を生かす方法は無いと言ったため。

ウ 美緒が、自分の良い点を探す気にはなれないと言ったため。

エ 美緒が、自分のことは自分がよく分かっていると云ったため。

問七 —— 部⑤「手始め」とあるが、どのようなことの「手始め」か。二十字以内で答えなさい。

問八 —— 部⑥「祖父は目を細めてまだ笑っていた」とあるが、その理由としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美緒が自分でも気に入っているスプーンを選んでくれたことで、やはり心はつながっていると安心したから。

イ 美緒が自分の感性でお気に入りのスプーンを選び、その上おどけることまでできたことが嬉しかったから。

ウ 美緒が突然おどけたことを不審には感じたものの、自分に心を開いてくれたことをありがたく感じたから。

エ 美緒が何とか気に入ったスプーンを選び、自分にほめられたような気持ちになったことを愛しく感じたから。

三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

【本文】

弥生も末の七日、あけぼのの空朧朧ろうろうとして、月は有明にて、光をさまれるものから、不二の峰幽かすかに見えて、上野・谷中の花の梢こずえまたいつかはと心ほそし。むつまじきかぎりは宵よりつとひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふたがりて、幻のちまたに離別の涙をそそく。

行く春や鳥啼なき魚の目は涙

(『奥の細道』)

【現代語訳】

陰暦 A 月も下旬の二十七日、明けがたの空は、おぼろにかすんで、月は有明の月で光は薄らいでいるものの、(遠くは) B の峰がかすかに見え、(近くは) 上野や谷中の桜の梢こずえが(見えるが、その眺めも)またいつの日に見ることができようかと、心細い気がする。親しい人たちは残らず前の晩から集まって、(けさは一緒に)舟に乗って見送ってくれる。千住という所で舟から上がると、(いよいよ)前途遙かな旅に出るのだという感慨が胸一ぱいになり、(どうせこの世は夢・幻のようなものだと思いつつも、いざ千住の別れ道に立って別れようとする)、その)幻の別れ道に、別れの涙を流すことであった。

問一 空欄 A・B について次の問いに答えなさい。

- (1) A にはあてはまる数字を漢数字で答えなさい。
B にはあてはまる名詞を、現代の一般的な表記で答えなさい。

問二 —— 部「心ほそし」とあるが、このような思いになった理由としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア これから親しい人と別れてしまうことに、さみしさを感じているため。
イ 遠くの月や峰の景色に比べ、近くの景色には雄大さがなかったため。
ウ 上野や谷中の桜の花が、まもなく散って見られなくなってしまったため。
エ 住み慣れた地の美しい景色を、これから長い間見られなくなるため。

問三 【本文】の俳句について次の問いに答えなさい。

(1) この句の句切れとして正しいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初句切れ イ 二句切れ ウ 三句切れ エ 句切れなし

(2) この句の説明としてもつともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 身近な複数の生き物を登場させ、視覚や触覚、聴覚といった五感全てを活用させて別れの悲しさを述べている。

イ 過ぎ去る春を自分に見立てて、同様に過ぎ去っていく鳥や魚でさえも悲しんでいるという共感を述べている。

ウ 別れの訪問をしてくれた人々を複数の生き物に見立て、騒がしい宴はかえってさみしさは際立つものと述べている。

エ 本来は心を持たない鳥や魚でさえ悲しみ、過ぎ行く春を惜しむ中に見送りの人々への惜別の情を述べている。

問四 本文の編者を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 井原西鶴 イ 鴨長明 ウ 松尾芭蕉 エ 小林一茶

